

令和元年5月18日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02376

研究課題名(和文) 亡命文学と神話に関する基礎的研究：フォンダーヌとヴォロンカを中心に

研究課題名(英文) A basic study on exile literature and mythology : Fondane and Voronca

研究代表者

岩津 航 (IWATSU, Ko)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：60507359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：バンジャマン・フォンダーヌ(1898-1944)とイラリエ・ヴォロンカ(1903-1946)は、ともにルーマニア出身のユダヤ系詩人で、1930年代からは主にフランス語で著作活動を実践した。本研究は、彼らの作品に頻出するオデュッセウス神話やユダヤ神話のイメージが、亡命の主題と相まって、彼らの想像力をどのように構造化したかを明らかにするものである。フランス、アルゼンチン、ルーマニアでの文献調査と、多国籍の研究者との協議を経て、研究成果として学術論文3本(うち1本は単行本収録)を刊行し、研究発表を8回行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バンジャマン・フォンダーヌとイラリエ・ヴォロンカという、フランス語圏で再評価が進む二人の詩人について、日本における先駆的研究を提示するとともに、亡命や移民の個人的経験がもつ抒情性に神話が叙事的な枠組みを与えて構造化する過程を解明した。亡命文学という20世紀以降の重要なジャンルの作品読解の方法として、神話分析が有効であることを内外に示し、かつルーマニア、フランス、ユダヤ、アルゼンチンといった複数の国や言語にまたがる彼らの文学の全体像を多様な文脈から解読したことは、国家=国民=国語という三要素の結合が解体されつつある21世紀文学の状況を理解するうえでも、重要な示唆を含むものである。

研究成果の概要(英文)：Benjamin Fondane (1898-1944) and Ilarie Voronca (1903-1946) were Jewish poets from Roumania who wrote their books in French since 1930s. The present study focuses on how mythologic images taken frequently from Odyssey or Jewish legends structuralize, through their exile experience, their own imagination. Following bibliographic research in France, Argentina, Roumania, and discussions with international colleagues, were published 3 articles (of which one is included in a book), and gave 8 presentations in symposiums or seminars as achievement of this study.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：神話 ユダヤ系詩人 フォンダーヌ ヴォロンカ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象であるバンジャマン・フォンダーヌ(1898-1944)とイラリエ・ヴォロンカ(1903-1946)は、ともにルーマニア出身のユダヤ系詩人であるが、1930年代からは移住先のフランスで、フランス語を中心に著作を展開した、典型的な亡命文学者である。両者とも、第二次大戦後は一度忘れ去られたが、フォンダーヌは1990年代以降、再刊と研究が活発になり、M. Jutrin や M. Finkenthal をはじめとする研究者が優れた論考を発表している。一方、ヴォロンカは、2011年に Ch. Dauphin による初めての伝記が出て、詩人の経歴は明らかになったものの、作品分析に踏み込んだ研究はまだごく僅かしかない。日本では、両者を対象とした研究は極めて少なく、申請者は論文発表や口頭発表を通じて、この二人に関してはすでに日本における先駆的研究をリードしてきた。

申請者は特に、二人の詩人におけるユリシーズ(オデュッセウス)神話の受容に関して考察を進めてきた。ヴォロンカは1928年にルーマニア語で、フォンダーヌは1933年にそれぞれ『ユリシーズ』と題する詩集を刊行した。周知の通り、ユリシーズ神話は、ウェルギリウスからダンテを経てボードレルに至るまで、ヨーロッパ文学史を貫く重要なトポスである。流浪の王の物語は、潜在的な亡命者の神話として解釈できる。両大戦間に、ジョイスをはじめとして、ユリシーズ神話の文学的引用が大量に出現することから、フォンダーヌとヴォロンカにおける神話の援用が、同時代の大きな文学潮流と交差するものであったことを、文献調査によって明らかにすることを目的として研究を開始した。

神話とは、繰り返し語られてきた物語である。そのため、文学史的側面からの研究が不可欠となる。亡命文学の特徴を「神話の援用」というキーワードから読み解く試みは、単に二人の詩人の研究にとどまらず、20世紀文学の読解に新たな観点をもたらすものになることが期待される。神話研究、亡命ユダヤ人研究など、これまで個別に論じられてきた事項を、総合的な視点から記述し、関連づけることで、新たな文学史の構想に寄与していくことが期待できる。

とりわけ20世紀は、多くの文学者が亡命を余儀なくされ、それまで置かれていた言語環境を奪われて、異郷に没した時代である。それは科学技術の発達と経済のグローバル化によって、世界が一つになったことの裏返しでもある。文学者は自己の置かれた環境の全体を表現する。亡命文学という20世紀に顕著になった現象を理解することは、社会構造や思想のほとんどを20世紀から受け継いでいる私たちが生きる現代の全面的理解に寄与するものである。フォンダーヌとヴォロンカの研究は、単に亡命文学のケーススタディであるだけでなく、20世紀文学の特徴を解明するうえで、重要な問題を提起する。その際、想像力を歴史的・文化的に構造化する契機としての神話に注目することは、ヨーロッパの伝統と亡命文学者との関係を測るうえで、極めて示唆的である。

申請者は、日本の作家福永武彦の作品における神話の援用の分析を行い、その成果を2012年に『死の島からの旅 福永武彦と神話・芸術・文学』(世界史奏者)として上梓した。そのなかで、申請者は、福永がいかに東西の神話を独自に習合させ、小説をつくりあげていく想像力を構造化したかを明らかにした。この福永武彦研究で得た方法を、フォンダーヌとヴォロンカの研究にも応用することを目指したのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、バンジャマン・フォンダーヌとイラリエ・ヴォロンカの作品を中心に、亡命文学と神話の関係を明らかにすることである。先述のとおり、二人は典型的な亡命文学者である。そして両者とも、ギリシア神話やユダヤ神話を題材にした詩と散文を発表した。

作家が文学作品に神話を引用する際には、オリジナルの神話に対して何らかの改変が加えられる(P. Brunel, *Mythocritique*, 1990)。そうした神話の文学的引用は、本研究の対象である亡命文学において、おもに二つの機能を果たしている。1) 神話の引用によって、亡命が個人的な境遇から、反復可能な普遍的な構図へと置き換えられる。2) 神話の引用は、孤独や希望といった抒情的主題に叙事性を与える(P. Beray, B. Fondane, *au temps du poème*, 2006)。フォンダーヌとヴォロンカの作品はとくにその特徴が顕著であり、注目に値する。

本研究では、身体的な移動および言語的な断絶といった作家個人の境遇の変化がどのようなかたちで普遍的構図に置き換えられているのか、また、作家の抒情的主題に対してどのように叙事性が与えられているか、を明らかにした。別の言い方をすれば、神話がいかに詩人の想像力を構造化するかを解明した。これは亡命作家と神話の関係を類型化するための基礎作業として位置づけられる。

ただし、類型化といっても、二人が同様であるという意味ではない。直接的にユダヤの神に呼びかけ、移民の孤独と人間存在の意味を哲学的に探求したフォンダーヌと、世俗的で、表面上は明るい希望の詩を書きながら、その内実はユダヤ的不安に満ちていたヴォロンカとでは、履歴は酷似していても、作風は対照的である。神話が亡命作家の想像力を構造化する道筋は単一ではなく、複数の文脈のなかで理解されるべきである。両者の対照研究は、その意味では、亡命文学と神話との関係の多様性を明確にしていく作業でもある。

二人の詩人の分析から得られた知見を蓄積し、今後、20世紀ヨーロッパ全体を射程に収めた、より広汎な研究対象（ゲラシム・ルカ、ロマン・ガリ等）へと応用し、さらに類型化の精度を高めていくことが期待される。

3. 研究の方法

本研究期間中にも、フォンダーヌの『シエストフとの出会い』（2016）やヴォロンカの未刊行日記および小説『偽の魂の告白』（ともに2018）が復刊されるなど、両者への関心は依然として高い。こうした最新の刊本や研究書を入手することで、研究環境の更新が可能となった。

文献購入と読解作業が本研究の主軸ではあるが、海外における文献調査および研究者との面談も研究計画に含まれる。本研究期間中に、それぞれ3度実施した。

まず、文献調査として、2015年9月にパリのフランス国立図書館(BnF)でフォンダーヌとヴォロンカのテキストが掲載された雑誌を閲覧した。とくにフォンダーヌとヴォロンカがともに寄稿していたマルセイユの文芸誌『カイエ・デュ・シュッド』を中心に、作品発表時の書評などを発見し、どのような文脈で二人の作品が受容されたかを解明する手がかりを得た。2018年3月には、ブエノスアイレスのアルゼンチン国立図書館(Biblioteca Nacional)で、フォンダーヌのテキストが掲載された雑誌や新聞資料等を調査し、フォンダーヌがどのように受容されていたかを検証した。これにより、『スール』や『シンテシス』といった雑誌において、フォンダーヌが当時のスペイン語圏詩人の文芸運動、とりわけ「28年世代」とリンクするかたちで紹介されていたことを解明した。2019年2月には、ブカレストのフランス文化会館等で文献収集を行い、とくにフォンダーヌの出身地ヤシにおけるユダヤ人の歴史に関する文献を入手した。

研究者との面談については、2015年9月にパリ郊外で、ヴォロンカの評伝の著者 Christophe Dauphin 氏と面談し、ヴォロンカをめぐる最新の研究状況について知見を得た。2016年10月には、アメリカ合衆国ジョージア州のホプキンス大学の Michael Finkenthal 教授を招聘し、金沢大学にて講演会を実施した。講演会后、西田幾多郎記念館館長に紹介し、フォンダーヌと禅における実存主義哲学の可能性について議論した。2019年2月にティミショアラを訪れ、シオラン研究者の Ciprian Valcan 氏とルーマニア出身のフランス語作家に関する知見を交換した。

このように、科研費による文献調査および国際的な研究ネットワークの構築は順調に進み、今後の研究を推進するうえで大きな支えとなっている。

4. 研究成果

研究成果については、申請者が所属する日本フランス語フランス文学会または日本比較文学会などで、随時発表したほか、金沢大学が主催する公開シンポジウム等の機会を積極的に活用し、ひろく社会に研究成果を還元した。

下記の通り、学術誌への論文掲載2本、図書収録論文1本、研究発表8本を通じて、研究成果を公表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 岩津航「Benjamin Fondane en lettres argentines」、2019年7月、*Alkemie, Classiques Garnier*, n° 23, 査読有。

2. 岩津航「変身と幽霊 イラリエ・ヴォロンカの散文作品におけるアイデンティティ」、2018年6月、『日本フランス語フランス文学会中部支部論集』第50号、日本フランス語フランス文学会中部支部、p. 45-64, 査読有。

〔学会発表〕(計8件)

1. 岩津航「フォンダーヌとアルゼンチン もうひとつのオデュッセイア」、2019年3月21日、金沢大学人文学類シンポジウム、金沢大学

2. 岩津航「変身と幽霊 イラリエ・ヴォロンカの散文作品におけるアイデンティティの問題について」、2017年12月2日、日本フランス語フランス文学会中部支部大会、富山大学

3. 岩津航「フォンダーヌとユリシーズ神話の現代性」、2017年11月4日、日本比較文学会関西大会、石川県文教会館

4. 岩津航「バンジャマン・フォンダーヌ早わかり」、2016年10月18日、Michael Finkenthal教授(The Johns Hopkins University)の招待講演「フォンダーヌ、深淵の縁を歩く人」における事前解説および通訳、金沢大学
5. 岩津航「ルーマニア出身のユダヤ系フランス語詩人にとってのパリ　フォンダーヌとヴォロンカの場合」、2016年9月25日、第5回世界文学・語圏横断ネットワーク研究集会、立命館大学
6. 岩津航「フォンダーヌとヴォロンカ　二つの『ユリシーズ』をめぐる」、2015年9月20日、日本比較文学会関西支部例会、立命館大学
7. 岩津航「帰郷と冒険の物語『オデュッセイア』の系譜～移民の時代を読む～」、2015年9月6日、金沢大学サテライト・プラザ ミニ講演
8. 岩津航「ユリシーズを書きかえる　ダンテ、ボードレー、フォンダーヌ」、2015年7月11日、第8回金沢大学人文学類シンポジウム、IT ビジネスプラザ武蔵

(図書)(計1件)

1. 岩津航・佐藤文彦・杉山欣也・鈴木暁世・高田茂樹・西村聡『文学海を渡る　越境と変容　の新展開』、三弥井書店、2016年12月。学術論文「ユリシーズ神話の現代性　バンジャマン・フォンダーヌを中心に」、p. 109-155.

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。